

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
【フィールド・ノート】 no. 87 Dec. 2015



FIELD NOTE

no. 87 Dec.

特集



神社に残る木

Studio Y.E'S のイス

木に宿るもの

見て 考えて 加工する

FIELD・NOTE

No.87 Dec. 2015

CONTENTS

特集



04 FIELD・MAP

08 神社に残る木

11 Studio Y.E.S のイス

14 木に宿るもの

16 見て考えて加工する

19 特集まとめ

20 フィールド・ミュージアムのたのしみ 第30回
木の実とアカネズミの知恵
食べる、貯える

22 ムササビ観察日記

24 フィールド暦

25 センサーカメラが写した動物たち

26 ビオトープだより 秋 no.7

28 ヤマネの巣箱と生きもの

31 西涼寺の泣きケヤキ

34 都留に伝わる唄

36 教えてください！遊びの思い出 第2回
道ばたの記憶

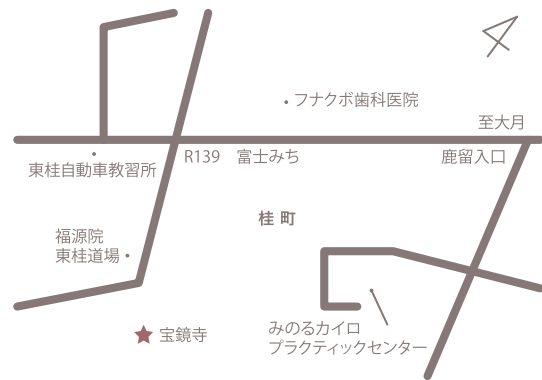
39 都留にいた組子職人

42 研究者が語る都留の魅力 第1回
富士山から湧水が届くまち 1

43 つるのひとこま

44 FIELD・NOTE News

都留文科大学地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門では、地域の自然や人々の暮らしの知恵を学ぶことが大切だと考えています。そこで、現場に出かけ、ていねいに観察し、記録し、その成果を共有する活動をしています。その一つが、学生が主体となって編集し発行している『フィールド・ノート』です。この冊子はフィールド・ミュージアム部門の機関誌として、県内外の読者に届けています。

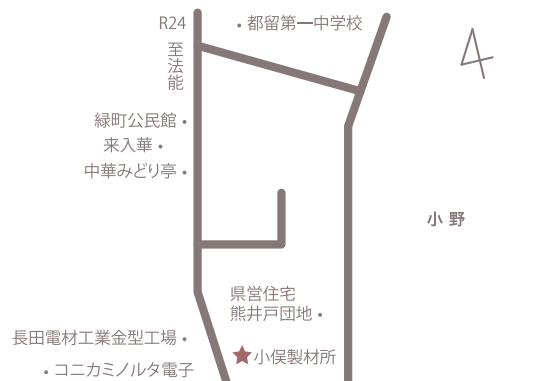


① 宝鏡寺 P14 - P15

〒 402-0034

山梨県都留市桂町 1047

☎ 0554-43-4459

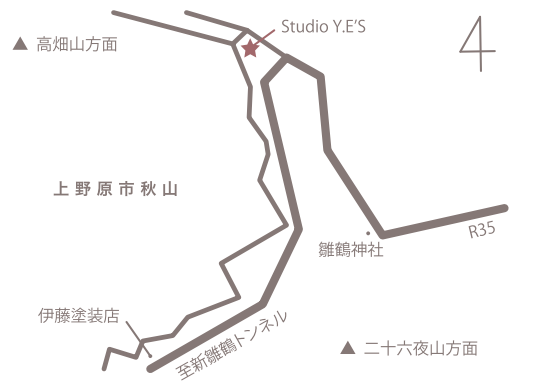


② 小俣製材所 P16 - P18

〒 402-0024

山梨県都留市小野 425

☎ 0554-43-2392



③ Studio Y.E'S P11 - P13

〒 401-0201

山梨県上野原市秋山 12490-22

☎ 090-2533-3684 (石塚えみこさん)



④ 西涼寺 P31 - P33

〒 402-0052

山梨県都留市中央 4 丁目 4-1

☎ 0554-43-2340



山梨県都留市

面積 161.63km²

総人口 31,529 人 (2015 年 11 月 1 日現在)

足元の水路には富士山の湧水が流れ、あたりの山々からはシカの鳴き声が聞こえます。山梨県都留市は、自然と人の暮らしを身近に感じることができる地域です。わたしたちがつくる『フィールド・ノート』では、じっさいに現場を見ることで感じた都留市の魅力を、記録し発信していきます。

特集

木

都留市は四方を森や林に囲まれたまちです。

地域に伝わる古地図の多くには、必ずといっていいほど、薪などをとるために使っていた柴山が描かれています。

私たちの生活に、昔から関わっている木。

燃料や食器、建材に使われるのはもちろん、信仰の対象とされることもあります。

また、生きものたちのすみかになったり、雨水を地面に蓄える役割を担ってくれたりもします。

けれど、木に囲まれた都留に暮らす人々が、どんなふうに木々と付き合ってきたのか。その記録は多くありません。

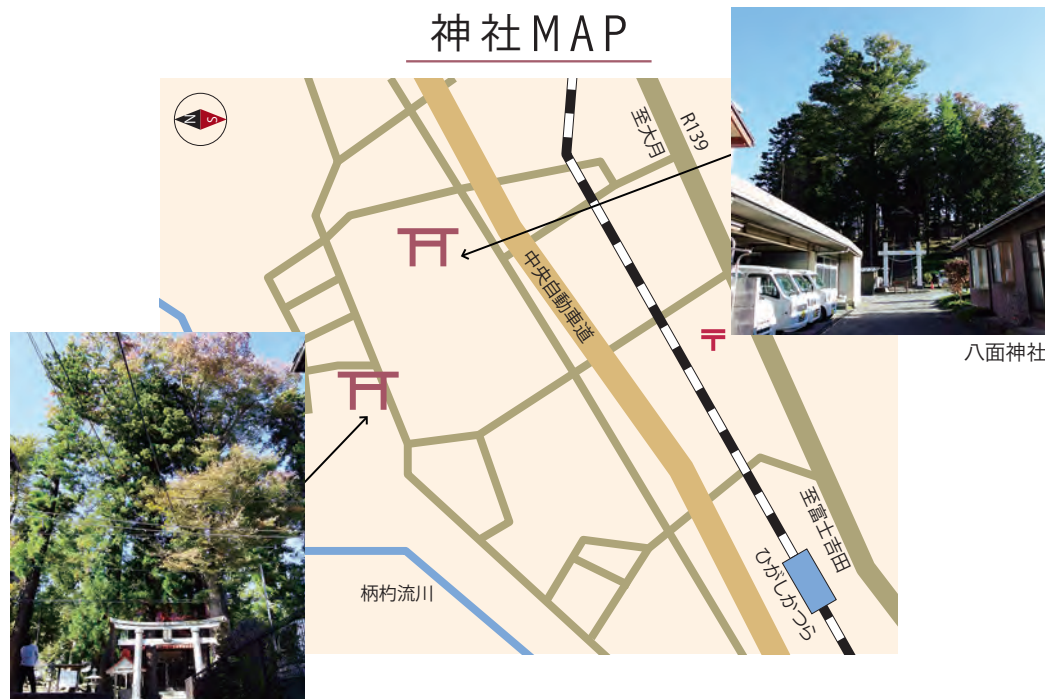
都留にはどんな木があるのだろう。

都留の人々は、木をどのように扱っているのだろう。

さまざまな木と、木に関わる人たちのことを私たちはもつと知りたいたったのです。



神社MAP



八面神社



十二天神社



写真左に見える木のまとまりが十二天神社。右が八面神社（2015.11.23）

神社に残る木

神社にはよくケヤキやスギの巨木が生えている。私はふだん山以外で大きな木を見ることはないで、近くを通るたびに目を奪われてしまう。それらは御神木や鎮守の森として信仰により守られてきたものだ。特定の宗教を信仰してはいないけれど、どこか神社の木に惹かれるところがあった。

立ち止まって見てしまう木

東桂駅を降り、都留市夏狩を富士吉田市方面へと15分ほど歩くと、柄杓流川沿いに民家が立ち並ぶ道に出る。その通りにあるのが十二天神社だ。10月25日正午過ぎにそこを訪れた。20m四方くらいの境内に、神社と民家を隔てるようにスギやケヤキが何本も生えている。数えてみると全部で35本。境内のふちに多く生えているが、本殿の近くには生えていない。頭上を葉が覆っていたため、境内は薄暗くひんやりとしていた。

十二天神社に来て最初に目に入ったのは、鳥居の周りに生えている木だ。3mくらいの鳥居の右脇にはケヤキが2本とスギが1本。左脇にはケヤキが1本とスギが2本。全部で

6本の巨木が、十二天神社の入り口を堂々と飾っていた。

なかでもとくに大きいのは鳥居の右にあるケヤキ。このケヤキのすぐそばからも大きな木が2本生えているので、1本の木のように合わさって見える。うねった根がところどころ地面から露出していて山の峰のように見えた。木には地面から3mほどのところに大きな穴があり、その穴からまた1mくらい上のところで2本に枝分かれしている。ちょうど紅葉しかけていて、頭上を覆う葉はオレンジ色と黄緑色が混ざった色だった。

近くに立つて見上げると、思わず声もれしてしまうほど大きいケヤキ。高さは目測で25mほど。学校にあるプールと同じくらいだ。幹の直径は私の胸の高さで測ると127cmあった。太い。岩のように硬いその幹に両手を広げて抱きついて、手がまわらないほどの大きさだ。

鳥居の周りには6本の巨木は、測つてみるとどれも幹の直径が100cm以上だ。高さもほとんど同じくらい。神社の周りには住宅

が多くこれらのように大きな木は見当たらない。そのため、遠くからでも木が生えているのが見える。住宅街から木が数本真つすぐに突きだしているのだ。木の下からだ、てっぺんを見るにも首が痛くなるくらい頭を上げなければ見えなかった。

古く見えない木

十二天神社から本殿が見えるくらい近くに、八面神社がある。そこは鳥居をくぐるとすぐに、本殿のある崖の上へと続く10mくらいの階段になっている。斜面の真んなかを通る階段を登り切ると本殿がお出迎え。十二天神社よりひとまわり境内が広く、本殿も大きい。この神社にも力強く根を張った巨木が生えている。

八面神社も境内を囲むように木が生えている。違うところといえば、階段がある斜面に細いスギとヒノキが合わせて20本ほど生えていること。巨木は階段を登り切つてすぐのところ、ケヤキが1本と、本殿のうらにスギとケヤキが数本である。



木は、色や形、質どれひとつとして同じものはない。
木材ひとつひとつと向き合いながら、都留市の木を使い
木工製品を作る小さな工房が、となりまちにあった。

伊藤瑠依 (社会学科3年) = 文・写真



八面神社のケヤキ。身長約170cmの男性が手を広げても、立派な幹を抱えきれない (2015.10.25)

なかでも本殿の左隣に生えるケヤキは貫禄があった。幹の直径は胸の高さで約170cm。私の身長とほとんど変わらないのだ。しかも、根っこは地面を広がるように伸びているので、根元の直径は胸の高さで測ったのよりも断然太い。木の高さも30mほどありそう。木肌ははがれている部分もある。この神社では一番大きく、きつと一番古い木だ。それでもこの木にはたくさん葉が茂っていて、緑色の葉が日光にすかされて青々としている。古い木なのに、まだ現役だと胸を張っているようだった。

2つの神社から

神社で見たいくつかの巨木。それらは何年も生え続けていて、生きいきとしていた。古い木は枯れてしまっても今にも折れそうなものだと思っていたけれど、むしろ力強く根を張っている。その木がこれまで経てきた時間を、その巨大さが物語っていた。

南條新 (初等教育学科2年) = 文・写真



右下：座らせてもらったイス。木肌がよくわかる

左下：製材された木。小俣製材所（P16 参照）で製材してもらうこともあるそう

P13：工房でイスを作る石塚さん

イスに座る

はじめてそのイスを見たとき、子ども用なのかなと思った。ふつうよりも小さく見えたし、手作り感のある削りや丸みを帯びた角が、なんともかわいらしかったのだ。

このイスは、都留市のとなりまち、上野原市秋山にあるStudio Y.E'sという木工所でひとつずつ手作りされている。作ったのは、石塚えみこさん（58）という小柄な女性のかたで、20年ほど前から独学で木工を始めたそう。

見せてもらったイスは、石塚さんのお宅で15年使われているものだった。背もたれはとて低く、身長159cmの私が座るとちょうど腰のあたりまで。15年触れられた背もたれは、つるつとしていてキラメル色。日の光が差し込むとふちがきらりと白く光ってかっこいい。長く使うことで美しくなるといえるのは、こういうことかと思う。

座ってみるとわかるのだが、ふつうのイスよりも少し低い。かかともつま先もペタンと地面について、足先の力はだらんと

抜けていく。こっちはもつと低いので、石塚さんにうながされ別のイスに座ってみると、確かに低いと感じた。目線はさほど変わらないので意識しなければわからないが、今度は太ももの力まで抜けていくように楽ちんだ。ただ驚くことに、こういった高さの違いはわずか1、2cmなのだそうです。石塚さんは言う。

「やっぱり、居心地のよさを提供したいので、たとえば背が低くて、私のように既製のもので居心地が悪い思いをしてるのであれば、少し（イスの高さを）低めに設定してあげたり。」

体の力を預けて一息つかせてくれるこれらのイスには、石塚さんのちよつとした工夫と気遣いがあった。

イスを作る

なんといつでもStudio Y.E'sの家具の特徴は、元の木の姿が見えること。このイスも両脇にごつごつとした木肌が残っていて、原木だったころの幹のようすがよくわかる。石塚さんは、ドングリがなるようなカシの木か



こういった製材の仕方でもイスができあがるのは、石塚さんの作りかたに秘密があった。

石塚さんのイス作りにマニュアルや図面はない。

「まず木がきて、そこでこんな形にしてあげようかなって思いで作ってる。料理もそうだけど、さじ加減。ここところはこんな感じでまとめてあげようかなって浮かんたときに、頭のなかには図面ができてる」。

節のあるなしや木目のきれいさといったことが、木材選びには重要だとよく聞く。でも、石塚さんは「むしろそういった風景を、いかにうまく活かしていくかっていうところが決め手かなって思ってます」とおっしゃった。

まずは石塚さんの目によって、じっくりと木のようなすが観察される。そうして探し出された魅力が、イスの形となつてさらに引き出される。型にはめるのではなく、むしろ伸ばしてやる。これが石塚さんのイス作りだ。私はイスに魅力を感じるだけでなく、石塚さんの、ものとのこうした向き合いかたにも惹かれている。

なんかだつたと思う、と記憶を掘り起こすように言った。もとは森に生えている木だったのだとあらためて気づかされる。さらに、ここで使われる材は、都留市や道志村など工房の近隣のものばかり。そしてそれらは、ほとんど原木のような状態で搬入される。石塚さんのパートナーであり、ご一緒に木工製品を作る有馬保男さん（67）が教えてください。

「丸太を単純にばーつと割るだけ。だから耳（樹皮）も全部残った状態で来るから、一枚一枚みんな違うわけ」。

有馬さんがおっしゃる通り、樹皮がついたままなので材というよりは、縦にスライスされた大木そのものという感じだ。

ふつうは加工しやすいよう、角材の状態で運ばれてくることが多いが、Studio Y.E'sは違う。



①五百羅漢堂のなか ②石像の羅漢。最近では寄進される羅漢像がお堂に入りきらなくなったので、境内に安置できるよう木像でなく石像の羅漢像を寄進してもらおうそうだ ③庫裏と羅漢堂を繋ぐ階段 ④境内の外観



上段 / 五百羅漢堂に並ぶ羅漢像。像の胸元に貼られた紙には寄進者の名前が書かれている

下段右 / 十六羅漢像の一体。羅漢像は一つひとつ表情から仕草、着ているものも異なり、同じものはない

下段左 / 寄進された五百羅漢像の一体。羅漢像は理想的な修行者の姿として貫禄ある姿でつくられることが多いのだが、この像はとてもひょうきんな仕草をしていて親しみやすさを感じた



木に宿るもの

宝鏡寺には126体の羅漢像がある。そのうち、最初につくられた16体は本堂と山門で使われていた木材が元になっているらしい。なぜ羅漢像はつくられたのか、その歴史を知りたくなった。

十六羅漢像という、16体でひとそろいの仏教の修行者の像がある。釈迦の入滅後、教えを託された16人の修行者を模している。また、五百羅漢像、というものもある。これは最初の仏教典籍に集った500人の弟子たち。こちらは、500体でひとそろい。どちらも、理想の修行者の姿として、ひろく人々から信仰されてきた。

都留市桂町にある宝鏡寺にも、この羅漢像がある。ここにある羅漢像は全部で126体。十六羅漢像がひとそろいと、五百羅漢像が110体。入りきらなかった十数体をのぞき、山頂にある五百羅漢堂に収められている。お寺のかたにお話を聞くと、十六羅漢像がつくられたのは1929年ごろのこと。本堂の改築と旧山門の取り壊しのさいにでた木材が使われている。当時三十三代目の住職であつた仏海さんの依頼により、都留市内に住む仏師が制作にあたつたそう。それから徐々に地域の人々や檀家のかたも羅漢像を寄進するようになり、今の数になったという。

羅漢堂へは庫裏(※)から続く屋根付きの階段を伝って行くことができる。さつそく、ごんまりしたお堂の扉を開ける。とたん、木のおいが、かたまりになって私にぶつかった気がした。驚くほど真新しい木においだった。薄暗いお堂のなかに目を凝らす。入って正面には釈迦像が置かれ、その周囲を階段状に羅漢像が囲む。像はどれも高さ65cmほどの大きさ。十六羅漢像は正面一番上の段に並んでいた。下段にあるものより木肌の色が濃く、台のつくりも異なっていて、体格もがっしりとした像が多く感じられた。

現在三十七代目住職のお母様である佐藤秀子さん(66)は、捨てられてもおかしくなかった木材を羅漢像にした理由を、「山門とか、そういうものの木には仏様の魂が宿っているから、焼いちゃったり捨てちゃうのはねって(よくない)ことだ」とおっしゃった。また、「古いものを大切に作る心からよね」とも。

長く大切にされたものには魂が宿ると聞く。長く使われてきた木からつくられた羅漢像には、仏様だけではなく、長く木を大切にしてきた人々の思いも宿っているのだろう。

見て考えて加工する

10月20日、14時過ぎに都留市小

野のおまた小俣製材所に到着。木の板に「小俣製材所」と大きく書かれた看板の下には、これまた大きな字で「賃挽」と書かれている。

お話を聞かせてくださった小俣英さん(28)は、はにかみながら挨拶してくださった。製材所の社長ということで強面の厳しい親方をイメージしていたけれど、想像していたよりも若くて、気さくな雰囲気のかただ。工場の奥にある小部屋をお借りしてお話を聞かせていただく。

小俣さんが製材所を継いだのは6年ほど前。当時、製材所の社長だった小俣さんのお父さんが、身体をこわしてしまったのがきっかけだったそう。

小俣さんの製材

小俣製材所では木を買って、挽いた材を売るのはなく、依頼されて運ばれてきた木を挽いて返す加工委託というやりかたをしている。大きな製材所になると木の種類や切りかたなど、決められていることも多いが、そういったところに比べて小俣製材所は融通が利きやすい。木材の種類や切りかたはお客さんが依頼したもので、小俣さんたちが売っているのは加工の作業。「材はお客さんのもの」なのだと小俣さんは言う。木はその木によって、部位によってとれるものが違う。お肉と一緒に、

建材だったり、工芸品だったり、あらゆるものに使われている材としての木。どの形になるためにも必要なのが「製材」だ。けれど製材って、じっさいにどんなことをするのだろう。木材がわたしたちの手元に届くまでに、どんな工程を経たのか知りたくなった。

と小俣さんが説明してくださる。木の大きさや曲がりかたを見極めてから切り出すのが昔からの製材のやりかたで、それが長持ちする切りかたでもあるそう。決められた規格だけでない、小俣さんの製材所ではそれができるのだ。

製材しているのはおもに、スギやヒノキ、カラマツなどの建築資材や土木用資材となる針葉樹。けれどほかにケヤキ、イチヨウ、クリなど雑木と呼ばれる木材も運ばれてくる。種類ならかなり多いとのこと。ほとんどが県内、とくに富士山や大月など郡内で採れるものだ。都留市内の木は、朝日曽雌や菅野などから来るものだそう。

「もし新築の家の壁とか柱の木に

ひびが入ってたらどう思います？」率直に言って、と小俣さんに尋ねられる。どうしよう、大丈夫なのだろうかと不安になりそうだ。信じられないでしょ、と小俣さんはわたしの反応を見てそう言い、「でも木ってそうなんですよ」と語ってくださいる。

木は切って時間を置けば曲がったりひびが入ったりするのが普通。だから一度切った木を乾燥させ、木材が自然に曲がるのを待ってからその木材に合わせて切り出す。製材の作業一つのために、昔は何ヶ月もかけていた。そうやって長い時間をかけることが今は難しいそうだ。個性がバラバラな木たちを、同じように見えるよう製材するのが製材屋さんの腕の見せどころだそう。

適材適所

じつさいに工場に出て木材を見せていただいた。厚さがだいたい5cmくらいの木の板が何枚も壁に立てかけてある。長さは2mより少し長いくらいだろうか。見上げていると、とてつもなく高い木のように感じてしまう。ふと工場内を見渡すと、あらゆるところにいろいろな長さ形の

木材が、所せましと置かれている。たとえば梁に使われる材はこう曲がってないとだめなんですよ、と指でゆるい弧を描きながら小俣さんが言う。で、と近くの木材を指しこれがこう曲がってるの、と木目を指でなぞって見せてくれる。言われてみればそんな気がするような。そうわたりが言う、それくらい微妙なものなのだと小俣さん。しかしそこは経験で分かるようになってくるしかないとおっしゃる。自分なりに真面

目に聞いていたつもりだったが、何言ってるのって感じでしょ、と笑われてしまった。

木は切ってみなければ、曲がりかたなどの性質が分からない。この木なら何に適しているからどう切っていくのかまで、昔の人は見越してやっていたのだ。木のこと、製材のこと、建築のこと、その先のこと。一本の木を加工するために考えなければいけないことはとても多い。

工場のなかに、細めの丸太が何本

も積まれているところがある。スギとヒノキだそうだが、わたしには見分けがつかない。ところが小俣さんは僕もちゃんとは分からないですとおっしゃる。ただ言えるのは、と教えてくださったのは、丸太の断面を見たとき真ん中と周りの色にあまり差がないのがヒノキなのだそうです。

ヒノキはもつとも加工するのに適した硬さの木で、スギはヒノキよりもやわらかい。硬さは日本で昔から採れる木のなかでは硬く、虫が嫌う



成分も入っている。建築資材にぴったりの材だったのだ。

想像よりも細い丸太が多かった。そのことを小俣さんに伝えると、あれはこういうふうになるんですけど、とわたしの足元に置かれていた木材を指された。3面だけ切られ平らになっていて、残りの面は木の皮が残されている。これは土木用で、堰堤^{えんてい}などに使うそう。細い木を使っているのは細くないと重くて運べないからだ。

もっと大きいものもありますよ、と所内を案内された。だいたい直径20cmくらいの木材が、整列して積まれている。これらは挽き直しをするものだそう。挽き直しとは、一度切った木材を乾燥させ、木が自然に曲がるのを待つてから整形すること。たとえば、中心にむかつてばつくりひびが入ったら、そのひびに沿って半分に割ってしまう。すると、使える材になるのだ。

これだと曲がり分が分かりやすいと、木材の一つを見せてもらう。確かに、わたしにも分かる程度には曲がっているというか、側面の線がまっすぐじゃない。それでもそんなに大きく曲がっているようには見えなかったけれど、考えてみれば家を建てたりするのだから少しでも狂いがあるものは困るはずだ。

◇ ◇ ◇

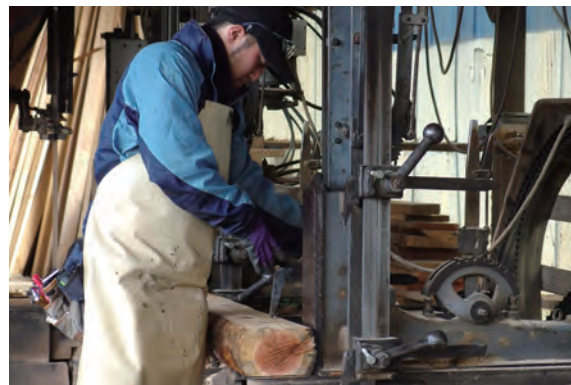
木の話だけで一晩飲めるくらい木は奥深いのだと、並べられた木材を見ながらおっしゃる小俣さん。お話のとき、「自分だつてまだ全然分らない」と何度もおっしゃっていた。小俣さんのようにほぼ毎日付き合っているもの分らないものなのだ。

後日、作業のようすを見学させてもらった。何倍にも大きくした電動のこぎりのような機械で、スギやヒノキの丸太を切る作業。お話しして

るときは軽い調子でにこやかな小俣さんだけれど、作業中は視線を木材から離さず、笑顔もない。表情は真剣そのものだ。

「分からない」と言いながらも考え、よく見ることで、木に真摯に向き合う。こうして加工された木材は、小俣さんの知恵や考えが詰まった、とても価値のある材にわたしには思えた。

舟田早帆(社会学科3年) 文・写真



作業のようす。スギやヒノキなどの丸太の機械に取り付け、木肌を削ぐように切っていく

木は生き続ける

ご神木として神社に植えられた木は、人々に大切に保護され、長い年月をそこで過ごします。材にするため切り倒された木も、長く使っていけるように手間をかけて加工され、家具や置物や家となり、生きていきます。

保護する、加工をする、使う。

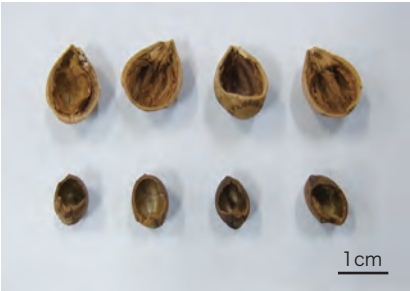
かわりかたは違うけれど

木を想い、大切にしてきた人たちに、私たちは出会いました。

こうした人たちの想いが、まるで年輪のように重なって木は生き続けていくのだと思うのです。



エゴノキの実を地面に隠す (2015.10.8)



ヤマガラが割った実。上がツノハシバミ、
下がエゴノキの実 (2014.10.30)



エゴノキの実をくわえたヤマガラ (2012.9.7 本学付属図書館ビオトープ)

食べる、貯える

ヤマガラとエゴノキの関係

秋から冬にかけては、木の実を食物として利用する鳥の行動を観察するのによい時期です。本学のキャンパスにはエゴノキが何本か植えられています。このエゴノキの実を食べるにヤマガラがよくやって来ます。8月下旬から10月下旬までの約2ヶ月間、複数のヤマガラがエゴノキに集まります。木の近くでじっとしていると、ヤマガラの行動を至近距離で観察できるでしょう。

ヤマガラはエゴノキの実を取り、それを両足で押さえて何度も強くつつきます。実を割って中身を食べるだけではなく、実をくわえてどこかに飛んで行くこともしばしばあります。そして、数分後にまた戻ってきます。このときはもう、実をくわえていません。さらに、地面に下りて実を埋める場面が見られたならとても幸運です。ヤマガラはエゴノキの実を食べる以外に、地面や樹皮の隙間などに実を隠す習性があります。実をくわえてどこかに飛んで行ったのは、実を隠していたのです。隠した実は冬から春に取り出して食べます。つまり、エゴノキの実は保存食にもなるわけです。

地面に隠した実の一部は取り出されないこ

とがあり、条件がよいと発芽し、エゴノキが増えていきます。なお、ヤマガラとシジュウカラはよく似た生活をしているますが、私はシジュウカラがエゴノキの実を食べるところは見たことがありません。

本学の附属図書館横ビオトープのエゴノキで観察をしていると、近くに生えているツノハシバミの実を食べるヤマガラがいました。エゴノキの実を割るときと同じように、両足で押さえてつつきます。あるとき、ツノハシバミの実が4個ついたものをくわえて飛んでいたヤマガラがそれを落としました。落とした実を回収して重さを量ると10gもありました。ヤマガラの体重は14〜20gとされていまして、体重のおよそ50〜70%もある実をくわえて飛んでいたことになりました。

ヤマガラはエゴノキの実を食べはしますが、エゴノキの種子散布に貢献します。このような両種の間には、長いあいだ続いていたように、野外で生きもの同士の関係を見ていると、動物と植物の分布がお互いどのように影響しているのかの一端に触れることがあります。

西教生(本学非常勤講師)＝文・写真

第30回

フィールド・ミュージアムのたのしみ

木の実とアカネズミの知恵

本学から車で20分ほどの距離にわたしの動物観察用の小屋があります。この小屋はわたしが大学3年生のときに建てたもので、いまでも野ネズミやニホンリスなど身近な野生哺乳類の観察に使っています。

小屋のまわりはスギとヒノキの植林地ですが、この小屋に通う林道にはコナラやオニグルミ、ハシバミなど、森の動物にとって大切な食物となる木も数多くあります。

秋の夜、林道を歩いていると、地面に落ちたこうした木の実を運ぶアカネズミによく出会います。しかしテンやイタチ、フクロウなどの天敵に襲われやすい地表は、アカネズミにとってけっして安全ではありません。いかに効率的に木の実を運ぶか、ということはアカネズミに限らず、ニホンリスにとっても切実な問題なのです。

そこで今年の秋、わたしは森でコナラやオニグルミ、ハシバミなどの実を拾い、アカネズミがどのようにして安全な場所に運んでいるのか確かめてみることにしました。

アカネズミはたいいてい岩の狭い隙間などで食事をします。こうした場所は、フクロウなどの天敵にも見つかりにくく安心できるから

北垣憲仁(本誌発行人)＝文・写真

でしょう。食事の場を観察できるように、20cm×20cm×20cmの小さな水槽を食事場にみためて使ってみました。水槽の底には、アカネズミが出入りできるように、27mmの円形の穴をあけました。水槽を使うことで、天敵に襲われる危険も少なくなります。

水槽のなかには、拾い集めたコナラとオニグルミ、ハシバミを置いてみました。アカネズミはいきなり水槽には入ってきません。まずは鼻先だけを入口から出して安全かどうかを確かめます。しばらくして安全だとわかったのはコナラでした。先端の尖った部分ではなく、必ず底の部分をくわえます。コナラにとっても底の部分をくわえてもらったほうが都合がよいのかもしれませんが、先端の尖った部分は根や茎が出てくるため生長に欠かせないからです。

つぎにくわえたのがハシバミでした。果肉の部分をかじって、なかにある実を取り出してくわえました。まずは軽くて小さく、すぐに運べるものから運びます。

最後に運びようとしたのがオニグルミでした。オニグルミの殻の合わせ目をくわえます



水槽の中、アカネズミがコナラの実をくわえている様子



水槽の中、アカネズミがハシバミの実をくわえている様子

が、残念なことに出入り口の穴よりもオニグルミのサイズが大きいため持ち運べません。アカネズミはオニグルミをくわえたまま何度か穴に押し込もうとします。その後、アカネズミは穴の外からくわえて引き出そうとしました。

結局、アカネズミは水槽のなかのオニグルミを外に持ち運ぶことはできませんでした。けれども、森で暮らすどのような生きものにも状況に応じて柔軟に対応する知恵がある、ということはこの秋に出会ったアカネズミが教えてくれました。

嬉しいことがありました！

11月17日 「ムササビを見せてください」



夏のムササビのようす

先日、「ムササビを見せてください」という家族連れが本学に来てくれました。しかし日中だったため、夜行性のムササビの活動のようすは見られませんでした。そこでムササビライブカメラのホームページで、夏のムササビの映像を見ていただきました。「都留文科大学＝キャンパスでムササビに出会える大学」というイメージが定着してきているのではないかと、実感する出来事でした。

10月20日 前足からわかる骨格



今回の写真は、夕方、巣箱を出ようとするムササビが「よいしょ」と巣穴に前足をかけた瞬間です。ムササビの前足のようすがよくわかりますね。ムササビの前足には、細長い軟骨があり、皮膜の面積を大きくしています。また、前足には鋭い爪があり、この爪のおかげで木をかけ登ることができるのです。

7月16日 台風の日



台風11号の影響で都留市は大雨、強風に見舞われました。そんな大荒れの夜にもかかわらず、ムササビが森に出て行くようすが確認されました。雨が降ると尻尾を傘がわりにするようですが、その夜は雨風が激しかったのでしょ。早朝巣箱に帰ってきたムササビは体全体に雨の雫が付き、濡れていました。

ムササビ 観察日記 - 2年目 -

2013年、ムササビライブカメラを2つの巣箱に取り付けました。本学ホームページ(<http://www.tsuru.ac.jp>)では『ムササビ観察日記』のブログを更新しており、ムササビのようすをご覧いただけます。みなさんも一緒にムササビのようすを見守っていきましょう。今号は夏から秋のムササビのようすをお伝えします。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

すみか ムササビの住処

ムササビは、おもに大木の生えた山中や河畔林に生息しています。とくにケヤキやスギなどの大木にできた樹洞（※）に巣をつくることが多いようです。樹洞は長い年月を経た木にできることが多いですが、現在はそうした大木は神社などに残る程度にまで少なくなっていました。そのため樹洞ができるほど成長していない木が多い地域では、枝の付け根あたりに枝や木の皮を組み合わせたボール状の巣をつくります。

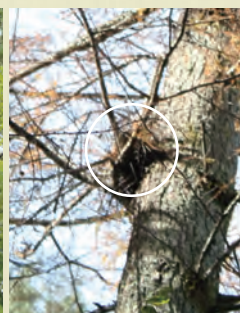
写真（右上）はムササビが木の皮を剥いでつくった巣材です。ムササビは前歯で木の皮を剥ぎとり、くわえて巣穴に持ち帰ります。本学のライブカメラでも巣材をくわえて帰ってくるようすが確認されています。

（※）樹洞とは、年月を経て大木にできた空洞のこと



樹洞の巣

ムササビの巣材
（スギの木の皮）
ムササビが巣材として使っていたスギの皮を見ると、繊維に沿って細かく裂かれています。触り心地はふんわりとしてやわらかでした



ボール状の巣

10月19日 つっぱすのはなぜでしょう



ムササビが巣箱の右下に頭をつっこみ、じっとしている姿が見られます。つっぱしている時間は数秒から数分とそのときどきによって違うようですが、頭を巣材のなかに入れ、じっとしています。ときおり、耳がピコピコと動いているので、起きていているようですが、いったいなぜこんなポーズをとるのでしょ。

8月11日 夏の楽しみと嬉しい帰宅



気温の上ったこの日はムササビも暑かったようす。頻繁に寝返りをうって両手足を広げていました。夏のムササビは表情豊かでとても見応えがあります。また、今年2月12日にテンが入って以来、使用されていなかったもう1つの巣箱にも半年ぶりにムササビが帰ってきました。

センサーカメラが写した動物たち

本学フィールド・ミュージアムでは、本学のうら山にセンサーカメラ（動物の体温を感知すると自動的にシャッターが切れるカメラ）を設置して動物の調査をしています。今回は、7～10月に撮影された動物を紹介します。 本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



ヤマネ (2015.07.26)
センサーカメラの上に乗っているところが撮影されました。設置している巣箱でも巣材が確認されています。



ハクビシン (2015.10.23)
都市部でも観察されることが多く、電線を歩く姿などを見かけます。同じく都市部で観察されるものにタヌキなどがいます。



イノシシ (2015.08.15)
この時期子連れのイノシシも撮影されます。水場では数頭のイノシシが水浴びする姿も観察されています。



コウモリ類 (2015.10.23)
今夏よりコウモリ用の巣箱を本学うら山に設置しています。設置後すぐにコウモリのもんと思われる糞が観察されました。



ツキノワグマ (2015.10.23)
遊歩道沿いで糞などは確認できていませんが、場所によっては日中に撮影されているところもあり、散策のさいには注意が必要です。

うら山の位置



フィールド暦

木々の色が色鮮やかに移ろう秋。しかし興味深いのは木々の移ろいだけではありません。今回は10～11月に見つけた少々珍しい生きものを中心にご紹介します。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



メボソムシクイ上種(*)の鳥 (2015.10.08) 都留市中央
都留市立図書館の窓ガラスに衝突して死んだと思われる鳥です。メボソムシクイ上種には3種ありますが、この3種はよく似ているため識別が困難です。しかし、外側の風切羽の長さや尾羽の色の特徴から、今回の個体はオオムシクイの可能性が高いです。
*上種…異種所に分布する近縁の種郡

イソヒヨドリ (2015.10.22) 都留市田原
本学附属図書館の上でイソヒヨドリのオスがさえずっていました。今年の5月ごろにはキャンパスでよく見られていました。イソヒヨドリは海岸付近に多い鳥ですが、近年は内陸部での繁殖も確認されています。



トラツグミ (2015.11.17) 都留市法能
住民のかたからトラツグミの死体が本学に届けられました。玄関の前に落ちていたとのことですので、窓ガラスに衝突したのかもしれませんが。トラツグミはほぼ1年中都留市で見られますが、数の少ない鳥です。観察するのが難しいことから、繁殖生態はよくわかっていません。

ヒイラギの花 (2015.10.1) 都留市田原
自然科学棟前でヒイラギの花が咲いていました。この花は本学では初めて確認したものです。キンモクセイのような甘い香りがしました。葉にはトゲがありますが、老木になるとこのトゲはなくなります。



シモバシラの花 (2015.10.17) 都留市田原
シモバシラは9～10月に花を咲かせます。シモバシラの名前の由来は、冬に茎の根元に氷柱ができ、この氷柱が霜柱のように見えることによります。昨年の12月には自然科学棟の前でこの氷柱が観察できました。

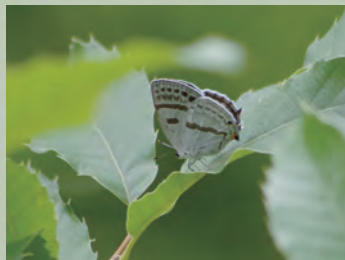
ビオトープだより 秋

no.07

チョウの調査

ビオトープで、チョウの調査を始めて2年が経ちました。昨年は、4～11月までに32種のチョウを確認しました。今年は4～10月にかけて調査をおこない、新たに8種のチョウが記録されました。今年の調査で確認したチョウのうち、4種を紹介します。

ミズイロオナガシジミ



早朝と夕方によく活動するチョウです。クヌギやコナラなどを食樹(※)とします。成虫は6～7月に見られます。(2015.06.25)

イチモンジチョウ



スイカズラやヤブウツギなどを食樹とします。成虫は5～9月にかけて断続的に見られます。(2015.07.24)

アサマイチモンジ



外見や生態はイチモンジチョウとよく似ていますが、赤線内側の白斑があるのが本種です。日本にのみ分布しています。(2015.08.06)

ムラサキツバメ



日本に多いチョウで、東日本へ分布を広げています。マテバシイなどが食樹です。成虫は4～10月にかけて見られ、成虫で越冬します。(2015.09.11)

※食樹:チョウが産卵し、^{ふか}孵化した幼虫が食べる植物。

ビオトープ (Biotops) とは、生きものたちが生息する空間のことです。語源は「生きものたち」をさす「Bio」、「空間」をさす「Topos」から。本学附属図書館横のビオトープでは、トンボやチョウなどの生きものがたくさん集まるよう、さまざまな植物が植えられています。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

ビオトープの木の実

ビオトープには、さまざまな実のなる植物が植えられています。実りの秋ということで、今回はそのなかのいくつかを紹介します。



エゴノキ (2015.10.16)
下に垂れるように実をつけます。実が熟す9月ごろになると、ヤマガラが実を求めてよく来ています。



ガマズミ (2015.09.26)
赤く熟した実は、酸味が強いですが、ヒヨドリが好んで食べに来ます。



ノブドウ (2015.11.06)
実の本当の色は赤紫色で、写真のように青紫色の実をつけるのは虫が寄生しているためだと言われています。



ツノハシバミ (2015.10.16)
先がとがった栗の形をした実が特徴です。日本版のヘーゼルナッツと言われており、熟した実は食べることができます。

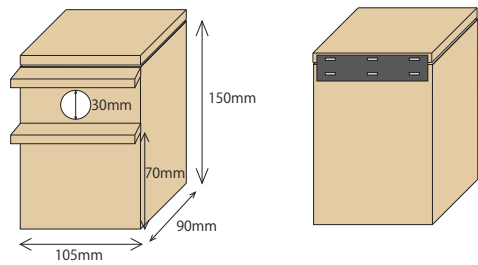
ヤマネ



2004 年都留市鹿留にて撮影（写真提供＝北垣憲仁）

ヤマネは日本固有種。全長は 10 ～ 14cm ほど。重さは約 18 g。背中に黒いすじ模様がある。夜行性・樹上性で森林に住み、苔を集めて巣とする。植物や昆虫、小鳥の卵などを食べる。冬には冬眠する。

巣箱



ふたは釘などで完全に開けられないように固定するのではなく、ゴム板で 1 ヲ所だけを固定している。これは簡単にふたを開けてなかを確認できるようにするため、観察をしやすくする工夫だ。

ヤマネの巣箱と生きもの

本学のうら山にヤマネの巣箱を設置した。巣箱を確認してみるとヤマネにも、ヤマネ以外の小さな生きものたちにも利用されていた。木にかけた巣箱が生きものの集まる場所になっている。どんな生きものが、どんな使いかたをしているのか巣箱のふたを開けるのが楽しみになった。

枝をつたって行動しやすいように、おもに木がある程度まとまっているところや、苔が多く生えているようなところにかけて。

かけた巣箱の大きさは高さ 150 mm 幅 105 mm 奥行き 90 mm の大きさのもの。入り口は直径 30 mm だ（上図）。この入り口を幹のほうに向けてかける。円形の入り口の上下には 2 枚の木の板があるので、木につけたときに木と巣箱のあいだに小さな隙間ができる。これは基本的に樹上で生活するヤマネがその隙間をつたって入りやすいようにするため。また入り口が外を向いていると、鳥が巣箱を利用することがあるので、それを防ぐためだ。この巣箱はヤマネが冬眠するときに使われるのではなく、8 ～ 10 月に一時的に利用されるようだ。巣箱の総数 40 個をうら山の 3 つの地点にかけた。

ヤマネの痕跡

9 月の終わりから 10 月の終わりにかけて、設置した巣箱の確認をおこなった。40 個のうちヤマネの痕跡と思われるものが見つかった巣箱は 3 個。1 つ目は大量の苔が巣箱のなかにあった。場所は広葉樹の生えている平地。

今年の 6 ～ 7 月、本学うら山の生きもの調査としておこなわれた、ヤマネの巣箱かけに同行した。巣箱かけの目的を本学非常勤講師の西教生^{にしのお}さんにうかがうと、うら山のヤマネの生息状況を確認するためだという。巣箱は、生きものが使用した痕跡が残るので、使用されたかどうか分かりやすく、観察にも適している。

またヤマネは、人の手があまり入ることのない標高 1000 m ぐらいの山地に生息することが多いといわれている。そんなヤマネが標高 500 m ほどの人里近い山、かつ植林地であるうら山にもいたらおもしろいのではないかということで、かけてみたそうだ。

巣箱をかける

巣箱をかけるために、私と西さんを含めた 5 人で山に入った。巣箱は地面から約 120 cm ～ 130 cm ぐらいのところにかける。巣箱のなかを見ようとすると背伸びしてようやくのぞけるぐらいの高さだ。巣箱をかける時にはシュロ縄（※）を使う。これは巣箱が落ちたときなどに、山に人工物が少しでも残らないようにするためだ。ヤマネの生息から、

使っている苔は 1 種類のように見える。巣箱をかけた木はケヤキで太さは直径 36 cm のもの。2 つ目は底に苔が薄く敷いてあった。場所は沢沿いの斜面で、まわりには苔の生えている岩も多い。かけていた木はクワで太さが 17 cm。3 つ目には細く裂いたスギの樹皮のようなものが入っていた。スギとヒノキの樹皮は似ていて一見同じように見える。しかしヒノキの樹皮は裂こうとしてもぼろぼろと崩れてしまうことと、まわりにはスギが多いことからスギの樹皮だと思われる。かけていた木はホオノキで太さは 38 cm のものだった。

ヤマネが使用したと思われる巣箱には、かけた木や場所など共通点はなかったが、確かに痕跡が残っていた。

巣箱と生きもの

かけていた巣箱はほかの生きものたちも利用していた。多くの巣箱にいたのは、マダラカマドウマやコアシダカグモ。マダラカマドウマは 1 つの巣箱に数匹入っていることが多い。苔が薄く入っていた巣箱にはヤケヤスデも一緒に入っていた。40 個中 2 個はアマガエルが入っていた。生きものを直接見たのはこ

（※）シュロの木のをよってひもにしたもの

西涼寺の 泣き ケヤキ

谷村にある西涼寺^{さいりょう}には「ケヤキ」に関する民話がある。文献を調べてみると、本によって話の内容が違っている。そのケヤキは本当に存在していたのか、なぜ本によって内容が違うのだろう。ケヤキについてもっと詳しく知るために、西涼寺にゆかりがあるお二人に話をうかがった。

今村遥香(社会学科2年)=文・写真

【参考文献】
内藤恭義『都留市の伝説』1968年
内藤恭義『都留の民話』なまよみ出版
1999年

もうひとつは、お姑さんにいじめられていたお嫁さんがあまりのつらさにケヤキで首をつり、それからケヤキが毎晩、ときには昼にも涙を流すようになったという話だ。

ひとつは、西涼寺に儀秀稲荷^{ぎしゅういなり}をまつるとき、ケヤキが邪魔になるので伐ろうとしたところ、キツネから「ケヤキを伐らないで」とお願いされ、伐採を取りやめると、ケヤキが嬉し涙を流すようになったという話。

【泣きケヤキのあらまし】
泣きケヤキの話は大きくふたつに分けられる。

ヤマネの痕跡



苔(①、②)やスギの樹皮(③)で巣がつくられていた。スギの巣材はヤマネよりも大きいように見える。小さな体でこれだけの巣材を運ぶのに何度巣箱を往復したのだろうか

巣箱にいた生きもの



④コアングカグモ。クモの巣を張らずに昆虫などを捕まえて食べる ⑤マダラカマドウマ。樹洞や樹皮の裏側、洞窟内などに生息する ⑥ニホンアマガエル。周囲の色にあわせ体色を変化させることができる

ヒメネズミと思われる痕跡



⑦ほとんどがケヤキの葉のようだった ⑧アブラチャンの実。この実を食べるといデータはないので、なんのために持ち込んだのかは不明だ

巣箱に残る 痕跡と 生きもの

れくらいだが、痕跡はほかにもたくさんある。持ち込まれたと思われる落ち葉や、アブラチャンの実やクリの実が入っている巣箱もあった。西さんに確認すると、これらはヒメネズミによるものと推測された。9月の終わりに調査したときには1個だけだったアブラチャンの実が、10月の終わりには50個になっていたことから巣箱が定期的に使われていることもわかった。

巣箱はヤマネ以外のたくさんの生きものにも使われていた。ほかの生きもののすみかとしても役に立っていたのだ。確認していると、ヤマネなどのふだんは姿を見ることが難しい生きものたちも、その痕跡から確かにそこにいるとわかる。巣箱を置くことでそこは身近な観察場所になる。巣箱は生きものとの距離を縮めてくれるのだ。

小俣溪和(社会学科2年)=文・写真
高橋未瑠来(社会学科2年)=写真

【参考文献】
西村豊『ヤマネのくらし』あかね書房 1999年
岩本敏『週刊日本の天然記念物動物編第11回配本』
小学館 2002年



西涼寺の儀秀稲荷大社から見た、泣きケヤキがあったと思われる場所。現在は1本のサクラが植えてある

ケヤキが泣くのは

泣きケヤキの話からはいろんな想像が広がる。さらに調べ続けたら話の全容が明らかになるのではないかと期待を抱いて、今度は西涼寺の近くで生まれ育ち、現在は富士吉田市下吉田で暮らしていらつしやる堀内明子さん（87）のもとを訪れた。

「雨が降ってもお天気でも、いつでもしずくがたれてるんですって」と泣きケヤキのこ

11月2日、泣きケヤキがあったといわれている西涼寺を訪ねた。西涼寺は本学から富士みちを都留市駅のほうへ曲がり、角あたりにあるお寺だ。右から東漸寺、専念寺、西涼寺と立派な門構えのお寺が立ち並んでいて、どれが西涼寺なのか分からず、少し迷子になりながらもたどり着いた。

ケヤキはあった

今回お話を聞かせてくださったのは、前住職の奥様である奈良幸子さん（78）。お庭が



奈良さんは歴史にお詳しい。泣きケヤキのことだけでなく、都留の歴史についても詳しく教えてください

一望できる畳のうかに通していただき、そこでお話をうかがった。奈良さんは席に着くやいなや再び立ち上がって、本棚から泣きケヤキの話が書いてある3冊の本を手にとって渡してくださった。すでに本学附属図書館で『都留の民話』と『都留市の伝説』という本に収録された話を読んでいたが、2冊とも内容が違っていた。さらに、奈良さんが見せてくれた3冊の本に書かれている内容も、それぞれ少しずつ結末が違う。

奈良さんがおっしゃるには、「300年も前のことですから、いろいろなさんがお話をくつつけたような感じでは」とのこと。私はその言葉を聞いて、どの泣きケヤキの話もただのつくり話だったのかとがっかりした。しかし、昭和24年に谷村で大火事が起こる前までは、西涼寺の裏山にケヤキが植えられていたことは事実らしい。西涼寺の裏山は昔、燃料として使用するための木々が植えられていて、台風や雨が續くと、しょっちゅう土砂崩れが起きていた。そこで燃料用の木々のあいだに砂防用として、根をしつかり張るケヤキを3段に植えていたという。そのケヤキが

とを説明する堀内さん。

堀内さんは子どものころ、西涼寺の裏山でよく遊んでいたという。その山のなかにはケヤキが植えられていたそうだが、涙を流しているような場面は見たことがないとおっしゃっていた。谷村の大火で西涼寺の裏山は燃え、ケヤキもなくなってしまった。その燃えた跡に、新しく2本のケヤキが植えられた記憶があると教えてくださった。それが燃えてしまった泣きケヤキを供養するためなのか、それともほかに理由があつて植えられたのかは、はつきりしない。

また、堀内さんは子どものときにまわりの大人から、ケヤキが泣いているのは「人が処刑されていたからだよ」と教えられたことがあるという。というのも、西涼寺の近くにある「田町公園」は、江戸時代に処刑場だったという話がある。その話に関連して、ケヤキが泣くのは人が処刑されたのを悲しんでいるからという話が出てきたのだろう。

今回、お二人に話を聞いて、泣きケヤキが本当にあったのかは分からなかった。しかし、西涼寺の裏山にケヤキがあったのは事実

谷村の大火で燃えてしまったのか、それともなにかの都合で伐られてしまったのかは、奈良さんもご存じではないそう。

泣きケヤキの話は、はじめからおわりまですべてつくり話というわけではない。少なくともケヤキがあったのは事実のようだ。

涙の正体は

「私はね、ケヤキに虫がついていたんじゃないかと思う。その虫からちびちびと、なか落ちてきて。それが不思議な現象だったから、今でも話が残っているのでは」と奈良さんは興味深いことをおっしゃった。

ケヤキの涙の正体はなんだったのだろう。奈良さんの推理が「虫の排泄物」だと聞いて、私は涙の正体は「樹液」だったのではないかと考えた。ケヤキは樹木のなかに寄生虫が入ると、身を守るためにアメ色の樹液を出す。樹液は人間でいう「かさぶた」のような役割をするそう。樹皮に固まった樹液が涙のように見える、人々が「ケヤキが涙を流している」と言い出したという説も十分ありえる。



はきはきと喋る堀内さん（右）。棚から泣きケヤキに関する本を数冊持ってきて見せてくださった（写真提供＝杉本仁氏）

だ。そのケヤキにあれこれと話が付け加えられて、さまざまな泣きケヤキの話が生まれたのではないかと思う。

民話はどこまでが本場で、どこからが嘘なのか分からない話が多い。それは全部が実話なのかもしれないし、ただのつくり話ということもある。話の真偽は分からないことが多いが、だからこそさまざまな想像が広がるのだと思う。そして、民話から自分で推理をしたり、話をつくってみたりするのがおもしろさのひとつなのだろうと感じた。

都留に 伝わる唄

特定の地域に伝わる伝統的な唄、民謡。都留ではかつてどんな唄が流れていたのだろうか。そして、どのように後世に伝えられていくのだろうか。

民謡の演奏

10月21日、三味線を演奏する団体である「鶯音の会」の練習が都留市中央の男女共同参画推進センター（びゅあ富士）で、開かれた。そこで、見学を兼ねてお話をうかがうことにした。

鶯音の会は、都留市の伝統的な祭りである八朔祭りの屋台でお囃子をするために結成された。「八朔の舞台上上がるんだし、せっかくだから都留の唄をやろう」と郷土民謡を掘り起こし、演奏している。三味線の経験者である木崎昌子さんは、鶯音の会のメンバーから「先生」と呼ばれていて、三味線の指導をしつつ唄っている。

会のメンバーが集まり、それぞれ三味線を取り出しながら会話を弾ませている。和やかな雰囲気ながらも、少し引き締まった顔つきになったのを見ると、いよいよ始まるなど胸が高鳴った。正確な音を奏するために、近くにいるメンバー同士で三味線のチューニング

がおこなわれる。中学校や高校の吹奏楽部のチューニングはよく目にしてきたが、弦楽器でのその場面は初めてで、つい食い入るように見ていた。互いに音の高さを微調整するようすから、全員でひとつの音楽をつくる意識込みが感じられた。

「よい」という木崎さんの声で、始めに演奏されたのは三番叟という三味線演奏用の楽曲。つづいて披露してくれたのは、都留市の郷土民謡「都留の機織り唄」。イベントなどでは5番までしか演奏しないそうだが、今回は特別に最後の7番まで披露してくれた。

機織り唄は仕事唄のため、機織りが機械化されるにつれ衰退した。木崎さんやほかの会のかたがたは、この唄をじつさに聴いたことはないらしい。「本当はどんな速さかもわからない。どんなリズムで機織りしてたのかな」と木崎さんはおっしゃった。この唄がどのように唄われていたのか、知っている人はいるか尋ねてみると、過去の演奏会で唄を口ずさんでいたお年寄りがいたという。そのかたはおそらく機織りをしていた家で育ったか、おばあさんたちが唄っていたのを耳にしていたのだろう。また、木崎さんのお知り合

いが出会ったお年寄りも唄を知っていたという。このお年寄りが唄ってくれた唄の節は木崎さんが唄う節とは少し違ったらしい。ここでいう節とは、音の高低や強弱が変化する境目のこと。草津温泉湯も唄に近い節であったという。時代や地域によって唄の歌詞や節は微妙に変化していると思われる。

また、木崎さんはこの唄のほかに新民謡を紹介してくれた。新民謡は大正末期から昭和期にかけて、全国でつくられるブームがあったそう。都留市では1954年以降に「谷村小唄」、「八端小唄」、「都留音頭」などができた。「郡内小唄」もそのうちのひとつだ。これは童謡詩人であり、日本各地を旅行しながらその地で民謡を創作していたことで有名な野口雨情さんがつくった唄だ。一説では、お



歌い手が歌詞を確認しているところ

「都留の機織り唄」

拝みあげます 機神様に
三日に一疋 織れる様に
織れる様に

唄はよいけど お話やおよし
話や仕事の 邪魔になる

紬勝山 あかげに染めて
春にや 祝いの もちをつく

真木の霜降り 田野倉萌黄
谷村縹子織 博多織

紬勝山 すか織小沼
大幡大吉 万格子

ちよいと拝見 主さんのお宅
いつかわが家に なるのだろう

唄は歌いたし 唄の数は知らず
唄のお師匠が あればよい

「郡内小唄」

背戸の松山 ばらばら時雨
しんと寒さが 身にしみる トノホイ
様を思くて 織る絵甲斐絹の
紅い心に 夜の吹ける トノホイホイホイ

秋の山水 澄む桂川
架けた猿橋 思案橋 トノホイ
ちらりちらりと 深みの淵に
落ちて行くぞい 木々の葉が トノホイホイホイ

今宵火祭り お山の祭り
燃ゆるなさけの 赤い火よ トノホイ
吉田上宿 浅間さまの
鳥居くぐって 行こうもの トノホイホイホイ

本栖 河口 山中 精進
樹海くぐれば 西の海 トノホイ
心々に 浮く水鳥の
波にゆられて 日を暮らす トノホイホイホイ

機織り唄とは

鶯音の会を見学した後、もう少し機織り唄のことを知りたいと思い、ミュージアム都留へと足を運んだ。芸芸員のかたにうかがうと、機織り唄がじつさに唄われていたのは明治から昭和にかけてで、昭和の初期にとっても盛

んだったそう。地域のなかで必ずしもすべての人が唄っていたかはわからない。記録として残っているのは都留市大幡の機神社に唄が捧げられていたことくらい。歌詞からもわかるように機織りをしていた女性たちの願いが込められているのだ。ほかには地域ごとに得意としていた織物や織りかたの名称が盛り込

まれていることがわかった。また1802年ごろに谷村を訪れた、都々逸斎仙歌坊という芸人が座興で歌った「郡内織物づくしの歌」という歌があった。この歌は機織り唄のもとになったともいわれている。

今回、さまざまな場所で都留にまつわる唄についてきくことができたが、じつさに機織り唄を唄っていたかたには出会えなかった。しかし、機織り唄が今の都留に住む人々にどのように伝えられているかを知ることができた。間の取りかたや雰囲気など、生で聴かないとわからないことばかりである。半世紀前に栄えていた唄がまた掘り起こされ、唄い継がれているのは、地域とのつながりが強い民謡ならではのことだと思う。人々が口ずさむことで伝わっていく唄。そのため、集められる情報は少なかった。しかし、唄われていたようすが簡単にわからないからこそ、唄に直接関わることのなかった人たちの、できるだけ当時に近づこうとする努力を見ることができた。

教えてください！

遊びの思い出

第二回

道ばたの記憶



尾県郷土資料館に並べてあったメンコ

「ながうま」の遊びかた



一番前の子に連なるようにして並び、前の子の腰を抱えて馬をつくる

馬を倒す組の子は、中腰になった馬の背中に手をついて跳び箱のように飛び乗る

一番前の子は電柱や壁に手をつけて中腰になる

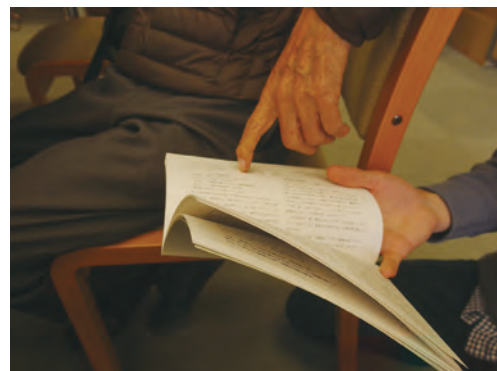
馬が倒れるか、上に飛び乗るほうが馬に振り落とされたら勝負が決まる

えてくれた。

夏が川遊びなら「ながうま」などはもっぱら冬にやる遊び。「体あつたかくしべえなあ(しようなあ)」。そう言い合って遊んだそう。

メンコの呼び名は地域で変わる

ほかにどんな遊びをしていたのか聞くと、まず出てきたのがメンコ。メンコは駄菓子屋さんで買っていたそう。おもしろかったのがその呼びかた。都留市本町周辺では「えつか」、これは、字で書くと「絵つ力」。絵が描いてあるカードという意味だ。そして安富さんが小学校5年生以降を過ごした、旧三吉村



遊びの説明があるページを指差して教えてください

今から80年ほど前、子どもたちは自分で遊び道具をつくって、遊びまわっていた。前身では夏の川遊びに焦点を当てて、お話をうかがった。当時男の子は外で、女の子は家のなかで遊ぶことが多かったそう。そこで、今回は外遊び編。当時の男の子たちに、遊びの武勇伝を教えてもらった。

安富さんの思い出

10月24日土曜日。待ち合わせ場所であるミュージアム都留に15分ほど早く着いた。あいさつをしようと事務室に入ると、そこにはすでに前回もお話を聞いた、安富一夫さん(88)の姿があった。こちらをちらつと上目遣いで見て、「待ってましたよ」と一言。少し世間話をしてから、さて、本題に入ります。安富さんが顔を上げた。自分の背筋がすつと伸びる。

安富さんは小学校5年生まで都留市本町に暮らしていた。外遊びの場所はいたい学校の校庭か、お宮さんだったという。お宮さんとは、神社のことだ。あるとき神社の鈴を鳴らすための縄にぶら下がってぐるぐるまわっていたことがあった。そうした

ら、鈴を繋ぐ縄がぷつりと切れて腰を地面にいやと言うほど打ったそう。安富さんは、顔を歪めて痛かったよーと、でもこんなことしてたんだぞと少し自慢げに、口調を早めて話してくださった。

神社にある舞などをやる舞台はかつこうの遊び場だったそう。そこでやっていたのが、「ながうま」という遊び。中腰になって前の子の腰を抱えて繋がり、馬になる組と上に飛び乗って馬を崩す組の二組に分かれて遊ぶ。いまいち馬が分からない私に、「こうこう」と足を肩幅に開き腰を曲げて深いお辞儀をしているような馬のかつこうを教



大きく身ぶりもつけて遊びかたを教えてくださいの安富一夫さん

では「ぺたんこ」、東桂では、「おこし」など、同じ遊びでも名前がちがうのだ。どの名前もメンコの遊びかたを連想させる名前ばかり。当時の子どもたちのネーミングセンスがとてもすてきだと思った。また、メンコのなかでも小さいサイズのは「ちよんびつ力」というのだそう。ちよんび、は小さいという意味、力はカードの力、だ。この遊びかたはふつうのメンコとはちがう。親指と人差し指ではさんで、ぎゅつとつまんで飛ばし、飛ぶ距離を競ったという。そんなメンコの遊びかたがあったなんて知りもしなかった。

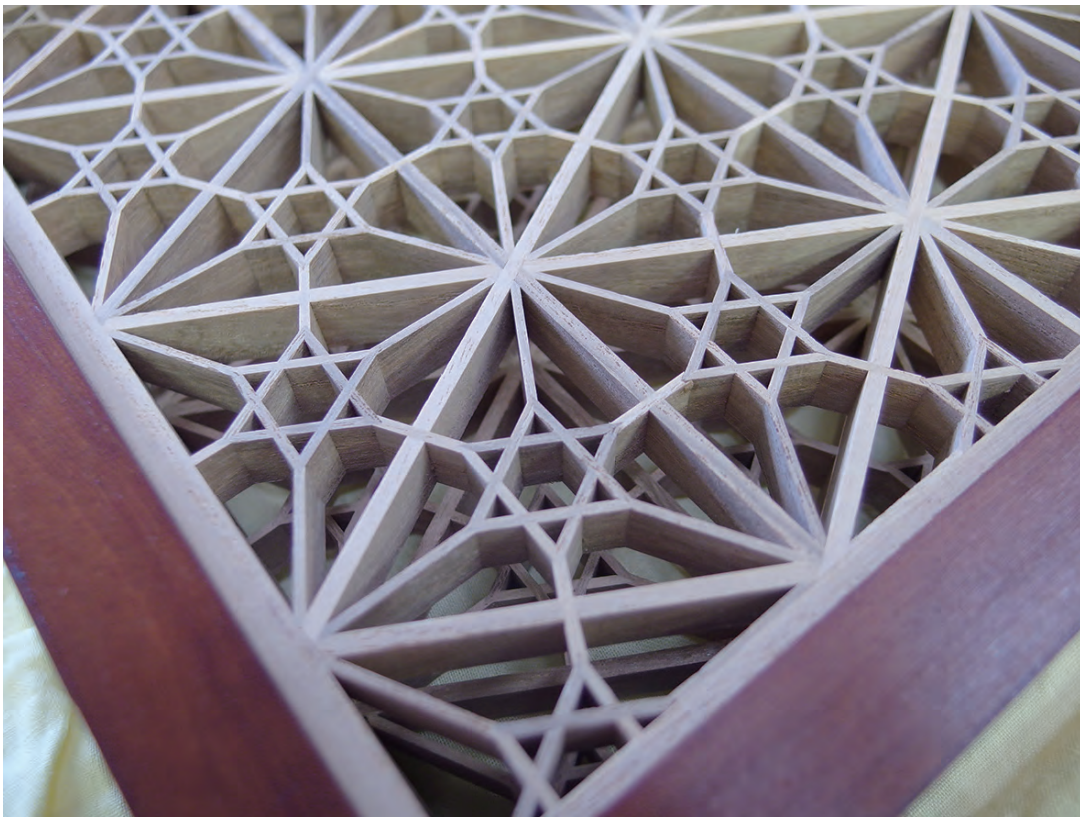
小形山では

当時の男の子たちの外遊びは、どれも想像力に溢れ、どこかダイナミックだ。そして、聞いているだけでこちらがどきどきわくわくしてしまうような遊びばかり。もつとちがう地域、ちがう人にも話を聞きたくなって、私は小形山を訪れた。

11月8日に尾県郷土資料館の館長、山本恒男さん(79)と、そのお知り合いの鈴木盛義さん(88)にお話を聞く。

鈴木さんは最初、私と館長さんの話を頷き

都留にいた組子職人



佐藤さんが十数年かけて作った菊文様の風呂敷屏風（※）（都留市教育委員会ミュージアム都留所蔵）

和風建築の家にある、障子やその上部の欄間には、組子と呼ばれる木工の装飾が施されているものが多い。その文様は木の部品をパズルのように組み付けることで作られている。じつは、組子細工は釘や接着剤を使っていない。部品同士の凹凸をはめ込んだり、先端を鋭くした部品同士を合わせるだけで固定しているのだ。都留には佐藤重雄さんという組子の職人がいた。私は佐藤さんをきっかけに組子細工の存在を知った。

高橋未瑠来（社会学科2年）＝文・写真

※主にお茶の席などで使われるついた衝立てのこと



山本恒男さん。ふと顔を下に向けて昔を思い出すような表情を浮かべていた

ながら聞いているだけで、自分からはあまり口を開けなかった。館長さんに、「で、今日の本当はなに聞きたかったの」と聞かれ、遊びの思い出について聞きたいと答えると、鈴木さんもあごに手を添え、目をじつと細めて当時の暮らしのことを話してくださった。

「ながうまつて知ってますか？」とこちらから質問してみた。「飛びうまじやないの？」とお二人。崩しはしないけど上に飛び乗るのだそうだ。あれ、似てる！

もしかしたら、地域によって遊びも生きものの進化みたいに細かく派生しているのかもしれない。そういえば、メンコの呼び名も地



木でできたそりを裏返すと、半分に割った竹がついている

域によってちがっていた。1つの話題から湧き出してくるみたいに話が広がっていく。

「昔の子たちは丈夫だったよ。寒かったけど着るもんがないから。あおっぱな垂らして、服の袖でズーッとぬぐうもんだから、袖がつかかてかになっちゃって」と話してくださったのは山本さん。ぬぐうしぐさを真似しながら話してくださった。

いつも遊び場所は校庭か家の庭。竹馬、そり、三輪車も自分たちで山などから材料を集めてつくっていた。そのの滑る刃のところに竹を半分に割ってつける。炙あぶって先を曲げるのだが、これがなかなか難しかったそうだ。

館長さんも、「俺なんか下手で、炙ったところがまあつくろになっちゃって」と言って鈴木さんと顔を見合わせて笑った。鈴木さんも大笑いだ。

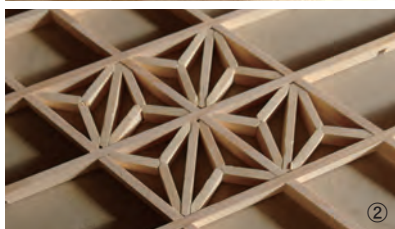
遊びの思い出を聞くこと

今回お話に出てきたメンコのように、地域によって遊びは同じだったり、少しちがっていたりしていた。そのちがいを知ることができたのはそれぞれの地域で遊んでいた人にお話を聞いたから。

どこでも遊び場、なんでも遊び道具。それでもそこにある物を最大限に活かして、楽しむことに関しては、安富さんや、鈴木さん、山本さんたちのように昔の子どもたちはずっと達者で豊かだったのかなと思う。

お話してくれた人たちはみな、こんな遊びがあつた、と、人ごとのように話すのではなく、こんなふうにして遊んだ、そうしたらこうだった、と自分の思い出の引き出しを開けて話してくださった。そんな、自分の武勇伝を聞いてくれと言わんばかりに語ってくれる目が、わたしは好きだ。

長尾泉（初等教育学科2年）＝文・写真



①ノミを使い、部品の端を削って角度をつける作業 ②麻の葉と呼ばれる文様
③部品を枠のなかにはめ込んでいる。この文様では二種類の異なった長さの部品を使っている。今回は特別に稀代木芸さん(『フィールド・ノート 62号参照』)にて組子を用意していただいた

組子の職人はカンナやノミを使って、はめ込む部品ぴったりの大きさに溝や穴を作ったり、角度をつけるために部品の端を削ったりする。その作業には0.1ミリの誤差も許されない。肉眼で見えないような隙間が、部品ががたつかせる原因になるからだ。そうした細かい作業がおもになるので、カンナだけでも何十種類と使い分けなければならないという。職人の使う道具は数えきれないほどだ。私たちが目にしたことのある障子や欄間の文様は、そうした職人の繊細な技術が光っている。和風建築が当たり前だった時代は、そういう工芸品がどこにでもあったというから驚きだ。しかし、最近では洋風化が進んで組子細工の需要は減少し、それにとまって職人の数も激減しているという。都留市で組子の職人をしていた佐藤さんは、組子の存在がだんだん希少になっていく時代のなかで組子を作り続けていた。

佐藤さんという人

じつは、佐藤さんはもう亡くなられている。ご本人を訪ねることはできなかったが、

佐藤さんをよく知るかたや、遺された資料から佐藤さんの人柄を知ることができた。お話を聞かせてくださったのは、本誌でもたびたびお世話になっている遠藤静江さん(83)。遠藤さんによると、当時佐藤さんは個人で組子細工を売っていたが、他人が見たら驚くような安い値段で売っていたという。

また、佐藤さんは組子のために結婚していなかった。一人前になる前に結婚しては職人としての技術を究められないと考えていたそう。だからお弟子さんが結婚することになったときも大反対していたことがあった。一番驚いたのは、佐藤さんが20匹ほどの猫を飼っていたという話だ。ほとんどがもともとは野良猫だったという。佐藤さんは猫について「猫はよいものです。猫は戦争しませんから」とおっしゃっていたそう。

お話を聞くなかで、佐藤さんは組子に関しては自分にも他人にも厳しい人という印象だった。まさに「職人」という、馴れ合いを好まないようなかただと思っていたのだ。そのイメージがあつたので、動物に囲まれて過ごしている場面を想像して意外に感じた。

遺された組子細工

遠藤さんのお宅には佐藤さんの作品がいくつかに保存されている。いただいたものだからと、大事にしまわれていた。見るべきができたのは、菱形を基本にした文様や、佐藤さんが独自に創作したすすき文様などの風呂敷屏風。すすきは曲線が難しいとおっしゃっていたそう。この文様は木材から曲線のある部品を切り出しているのだろう。そう考えたら、一般的な組子細工よりきつと難しいはずだと、佐藤さんの言葉に納得した。

佐藤さんの作品はほかにミュージアム都留にも寄贈されている。それは遠藤さんが勧めたことをきっかけに寄贈されたものだろう。このことは、いくつもの新聞で取り上げられている。たくさんの方が佐藤さんの作品に興味をもっていたのだ。寄贈するにあたって、当時の都留市市長が佐藤さんと作品を鑑賞しているようすを撮影した写真も残されている。

遠藤さんのお宅や、ミュージアム都留にある佐藤さんの組子を見たとき、ただただきれ



遠藤さんのお宅で保存されていたすすき文様の組子

永久に残る

組子はさまざまな人の手によって伝えられている。その一人に佐藤さんがいた。

佐藤さんは自分の組子をみんなに見てもらうことで組子細工を知ることにつなげられ、という希望を抱いていたそう。組子が希少になつていくなかで「日本で生まれたものだから永久に残る。」(街かど情報「SURU」第147号より)と断言できたのも、一心に組子を作り続けたという努力が自信を育てていたからだろう。

佐藤さんの作品は確実に組子を伝える媒体になつている。佐藤さんが都留で組子を作ってくれていたから、私も組子細工に興味をもつことができた。ただ、組子を知ることができたのは佐藤さんの作品のおかげだけではない。佐藤さんの組子細工に惹かれた多くの人たちが、遺された作品に価値を見出して大事にしてくれたおかげでもある。

みんなに愛されている佐藤さんの作品が、これからも多くの人たちに、組子の素晴らしさを知るきっかけを与えるのだろう。

つるのひとこま

『フィールド・ノート』では、地域みなさんと一緒にページをつくりたいと思い、みなさんから日常のひとこまを切り取った写真を募集していくことにしました。今号では、その一例として、編集部員が撮った「つるのひとこま」をご紹介します。『フィールド・ノート』編集部=文・写真



本学自然科学棟前
撮影者：鳥好きさん(20代 男性)
近くの水場に水を飲みにきていたヒヨドリ (2014.5.2)



田原の民家
撮影者：るいるいさん(20代 女性)
通学路でいつも見かけていた美味しそうな干し柿 (2013.11.28)



禾生コミュニティセンター
撮影者：長尾泉(20)
文化展で講演を披露していた板倉圭子さん (2015.10.23)



ミュージアム都留
撮影者：金原由佳(21)
地元のお年寄りのかたにしめ縄作りを教わりました (2014.11.29)

募集要項

- ・撮影日、撮影場所
- ・写真についてひとこと
- ・お名前
(匿名希望の方はペンネームでも可)
- ・年齢
(年代だけでも可)

写真はこちらまで

✉ field-1@tsuru.ac.jp

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1
都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部

みなさんの投稿、おまちしています！

連載

研究者が語る都留の魅力 第1回

富士山から湧水が届くまち 1

本学ではさまざまな先生がたが市内を対象に研究活動をしています。研究者である先生がたの目に、都留市はどのように映るのでしょうか。連載第1回から3回では、市内の湧水を研究する内山美恵子先生にお話をうかがいます。今回は、先生の研究の内容とその調査方法についてです。

◆ 地道な調査方法

富士山が噴火したさい、山から30kmほど離れた都留市にも溶岩が流れ込んだ。その溶岩の亀裂から湧水は流れ出ている。

現在、内山先生は、都留市十日市場の寺院、永寿院裏にある水路で、時間と共に生じる湧水の変化を調べている。

調査方法は意外にも古典的だ。流れの速さを計測する場合は、水路内に葉を流し、目印にした終点の棒の下を通過したとき、ストッ

プウォッチを止める。決められた区間内を何秒で通過したかを計測するのだ。流して止めるという作業を、20回は繰り返した後、平均を計算するという地道な作業である。

では、内山先生のこういった調査にどのような意味があるのだろうか。

◆ 湧水調査、その先に

内山先生によれば、都留市の湧水に関する研究は、近隣の富士吉田市や忍野村に比べて多くないという。近隣の地域では、戦後、農業用水を取水するために井戸を整備する過程で、地下水の調査も進められたそう。

いっぽう都留市は谷あいのできのため、もともと桂川をはじめとするさまざまな水脈が発達していた。江戸時代には、まちなかに用水路が整備されていたことなどから、新たに

井戸を掘る必要がなく、調査は進められてこなかったのだ。そのため先行研究が少なく、都留市の湧水については明確にされていないことも多い。

そんななか内山先生は、この調査が自然と人とが共存するための手がかりとなることをめざしている。

湧水のようなきれいな水は、たくさん利用してしまいたくなる。けれど、湧水は私たちの手元に届くまでに長い時間がかかるもの。今ある量を超えて使ってしまうと、枯渇してしまうかもしれないのだ。

利用の許容範囲はどこまでか、より効果的な保全の方法はなにか、そうしたことを考える材料のひとつに、内山先生の研究が必要とされている。

次回は市内に流れる湧水の成り立ちと特徴をお伝えします。

伊藤瑠依(社会学科3年) 文
内山美恵子先生(49)
COC推進機構特任教授
水理地質学専門。2010年から都留の調査を始める。

道志手帖とのコラボ企画



本学卒業生である香西恵さん^{こうさいけい}が刊行されている『道志手帖』。その9号「特集 道志と都留」に編集部有志が参加させていただきました。特集内に5名の編集部員による記事が掲載されています。

都留市内での活動を主としている私たちにとって、道志村と都留市のあいだにあった、人々の交流や関わり、歴史を知る貴重な機会となりました。



参加してみて

私は今回はじめて道志村を訪れました。都留からは峠を越えないと行くことができない道志村。ずっと行ってみたいな、と思っていましたが、なかなか機会を見つけれずにいました。この企画に参加して、都留と道志、2つの土地のあいだにはずっと昔から繋がれてきた文化があったのだと知りました。また道志に足を踏み入れたことで、まだ自分が知らない場所がたくさんある、もっといろんなところに行ってみたいという思いが今まで以上に強くなりました。(長尾泉)

香西さんより

在学中、車を持っていなかった私は、道志へ行ったことはほとんどなく、「近いけれど遠いところ」と感じていました。卒業後、道志へ来てはじめて、両地域には深い関わりがあることを知り、驚きました。こうした関わりを知っている都留の人は少ないのではないかと、都留の人に道志のことを知ってもらいたい、そう思ったのが今回の特集のきっかけです。

文大生の目で紹介していただいたことで、道志を知らない読者にとっても読みやすかった、という感想をたくさんもらいました。また、これも取材してみたら、という情報提供もあり、いずれ第二弾が組めるといいなあと考えています。

『道志手帖』に関するお問い合わせはこちらへ▼
道志村地域おこし協力隊 香西 (0554-52-2118)

学内に実のなるイチョウが増えました



自然科学棟前のイチョウ (2015.10.01)

一昨年から実がなり始め、昨年は自然科学棟の前にある2本と守衛室前にある3本に『フィールド・ノート』79号・83号参照)、今年は自然科学棟前の3本と、守衛室前のイチョウ並木のうち4本に実がなっているのを確認しました。本学の守衛さんのお話によると昨年は実があったのに今年はなっていない木があるようです。

イチョウは雌木にだけ実をつけますが、実をつけるまで雌木か雄木かはわかりません。また、実をつけるにも数年を要する木です。(廣瀬はづ紀)

真福寺の晋山式を見学しました



式典の様子 (2015.11.01)

都留市下小野にある真福寺の晋山式を見学しました。晋山式は住職の代替わりを祝っておこなわれる行事です。式には住職とその親族だけでなく、たくさんの檀家のかたが来られました。また、60年ぶりの貴重な行事のため、多くのかたがビデオやカメラで様子を撮影していました。

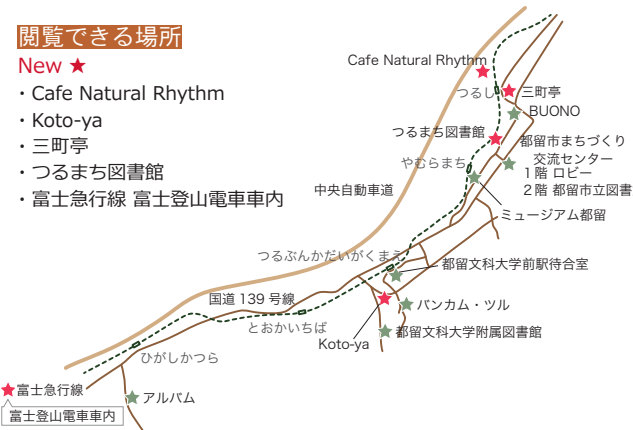
式典では父から住職を引き継いだ息子さんと、参列したほかの寺院の住職のかたがたとの禅問答が披露されました。禅問答は禅宗の僧が悟りをひらくためにおこなう問答で、雷鳴のように大きな声がぶつかりあう迫力あるものでした。(高橋未瑠来)

プチ・ニュース

閲覧できる場所

New ★

- ・ Cafe Natural Rhythm
- ・ Koto-ya
- ・ 三町亭
- ・ つるまち図書館
- ・ 富士急行線 富士登山電車車内



『フィールド・ノート』が読める場所が増えました。お近くにお立ちよりのさいには、ぜひご利用ください。

『フィールド・ノート』では、定期購読をご希望されるかた、また、本誌を置いていただける場所を募集しております。本誌末に記載されているメールアドレス、または電話にてお問い合わせください。お届け、または郵送いたします。



特集 古写真を手に(仮)

過去を知るため、私たちは昔の写真を手がかりにすることがあります。
これまで収集、保存してきた数多くの古写真。
次号では、そのなかから編集部員一人ひとりが気になった古写真を手に、都留を見ていきます。

2016年 3月発行予定



FIELD NOTE

no. 87 Dec.

表紙写真の言葉

どれ一つとして同じかたちはない木の年輪。自分が生きていた時代のようなすを思い浮かべながら、ついそれぞれの年輪を数えてしまう(撮影=北垣憲仁)

発行人
北垣憲仁 (20)
統括編集者
西教生 (21)
編集長
伊藤瑠依 (4-5,11-13,42)
舟田早帆 (16-19)
副編集長
長尾泉 (1,36-38,43,48)
南條新 (8-10,25)
編集
廣瀬はづ紀 (26-27)
別符沙都樹 (24)
加藤萌香 (22-23)
金原由佳 (6-7,14-15,44-45)
今村遥香 (31-33)
小俣溪和 (28-30)
高橋未瑠来 (39-41,46-47)
山内利奈 (2-3,34-35)
ロゴデザイン
工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELD NOTE (フィールド・ノート) 87号
発行日: 2015年12月24日
発行部数: 500部
発行・編集:
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学
コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門
『フィールド・ノート』編集部
E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下1階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記

気分をぱっと明るくする方法

も うやっぺいられない! そんな気持ちになったときは、いったん考えることをやめて「寝る・食べる・笑う」ことが一番です。アラームをかけずに思う存分ぐっすり寝たあとに、おいしいものを味わって食べて、友だちと腹を抱えて笑って……すると、あら不思議。どんより落ち込んだ気持ちはどこかへ消え去り、さあもう一度頑張ってみよう! という気持ちになれます。さらに、寒い時期はこれらに加えて温泉に入ったら気分は最高ですね。これが私の気分を上げるための最強ルーティーンです。(今村遥香)

く たくたに疲れたときや嫌なことがあって落ち込んだとき、私には決まって見る動画があります。それは neco 眠るの『ENGAWA DE DANCEHALL』という楽器演奏のみの楽曲のPVです。舞台は江戸時代。人間のほか、さまざまな動物や鬼が登場します。みんな独特のかわいらしさがあ、農作業やダンスをしています。そのメロディーとアニメーションが絶妙にマッチし、キャラクターの存在感を生み出しています。忘れていたなにかを思い出させてくれるような、穏やかな気分になれる一曲です。(山内利奈)

め んどうくさいことが嫌いな私は気分転換の方法をかなり簡単なものにしてしています。私がふだんやっているのは動くことです。といっても外でテニスをしたり、エクササイズをしたりするわけではありません。ただ床をごろごろんと転がったり、鏡にむかってポーズを決めたりするだけです。転がるときのおすすめは速度をつけること。ポーズを決めるときは思い切りよく、体全体をつかってポーズを決めること。お手軽なので皆さんにもやってみてほしいです。でもほかの人から見たらちょっと面白い光景かもしれませんね。(高橋未瑠来)

FIELD NOTE
no. 87

母におくる

都留からの贈りもの

お元気ですか。このまえ都留で、とてもすきなドレッシング屋さんを見つけてきました。お店の名前は「フレックル」。店主の小宮さおりさんは明るくて気さくなかたです。

ドレッシングのこだわりは都留でとれた材料でつくることと、添加物はなるべく使わないこと。野菜をおいしく食べてほしいというお母さん目線で作られたドレッシングは一口目からうなづいてしまうようなおいしさ。少し濃いめの味付けでサラダにかけるだけでももったいないです。小宮さんも「めざせ、万能調味料なの!」と笑顔で話してくれました。舌だけでなく、体もよろこぶドレッシング。いろんな料理に使ってみてね!



発行日 2015年12月24日 (年4回発行)
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階
地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門『フィールド・ノート』編集部